

メンバーお薦めの“この曲、この演奏”

プログラム

今日は我々“ゲヴァントハウス”のメンバーが選んだ「お薦めの“この曲、この演奏”」と題してお送りします。ハイドンのピアノ・ソナタ第50番は1794年～1795年ロンドン滞在中に作曲され、ベートーヴェンのソナタにも通じる豊かな響きを獲得しています。ヴェルディのレクイエムはオペラ的な劇的効果、美しい旋律を駆使した構成力など、古今のレクイエムのうちでも最高傑作に挙げられますが、この名曲を得意としていたのが巨匠カラヤンで、ライブ音源だけでも6種類を数えます。今日お聴き頂く当時の豪華歌手陣を迎えての1978年の演奏は緻密で圧倒的なスケール感を持った名演です。ドヴォルザークの「スケルツォ・カプリチオーソ」はスラヴ舞曲を高度に交響的にしたような作品で、民族色の強い巧みな管弦楽法に魅せられます。指揮のエリシュカは1931年チェコ生まれ。2004年に初来日以来急速にその評価を高めている名匠で、ここでの確信に満ち溢れた演奏はチェコ音楽の神髄を聴かせてくれます。スヴェトラノフと言えばロシアを代表する名指揮者として知られていますが、本国では作曲家としても有名で交響曲、ピアノ協奏曲など多くの作品を残しています。ヴァイオリンと管弦楽のための「詩曲」は1974年に亡くなった巨匠オISTRAフ追悼のために1975年作曲され“ダヴィード・オISTRAフの思い出に”という副題が付けられています。ロシア・ロマンティズムの伝統を受け継いだ抒情的な名曲です。ディーリアスの間奏曲「楽園への道」はドイツの作家ケラーの短編小説を基に歌劇として作曲、スイスの田園を背景にした悲恋物語「村のロメオとジュリエット」の終幕の場への間奏曲として、名指揮者ビーチャムの勧めで書かれました。牧歌的な美しさとドラマティックな側面も持ち合わせた不思議な魅力を放つ名曲。チャイコフスキーの交響曲第4番はパトロンのメック婦人に捧げられた最も情熱的な名曲ですが、当時ベーム & チェコ・フィルのチャイコフスキーという珍しい組み合わせで大興奮したものでした。ベームらしい強靱で熱い演奏です。ごゆっくりどうぞ。(中川)

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732~1809) :

ピアノ・ソナタ第50番ハ長調 Hob.50

アルフレード・ブレンデル(P)

(1981.8.15 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

ジュゼッペ・ヴェルディ (1813~1901) :

レクイエム(死者のためのミサ曲)から レクイエム~怒りの日~ラクリモーサ~リベラ・ミ

ミレルラ・フレニ (Sop)/アグネス・バルツァ (Msop)/ホセ・カレラス (T)

ニコライ・ギャウロフ (Bs)/ウィーン学友協会合唱団

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1978.8.28 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) :

スケルツォ・カプリチオーソ op.66

ラドミル・エリシュカ指揮札幌交響楽団

(2011.4.28 札幌コンサートホールKitaraでのLive)

*** 休憩 ***

エフゲニ・スヴェトラノフ (1928~2002) :

詩曲“ダヴィード・オISTRAフの思い出に”(ヴァイオリンと管弦楽のための)

加藤知子(V)

エフゲニ・スヴェトラノフ指揮NHK交響楽団

(1999.2.26 NHKホールでのLive)

フレデリック・テイリアス (1862~1934) :

間奏曲“楽園への道”(歌劇「村のロメオとジュリエット」より)

ジョン・バルビローリ指揮ボストン交響楽団

(1964.4.25 ボストン・シンフォニーホールでのLive)

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893) :

交響曲第4番ハ短調 op.36 ~ 第1楽章から、第4楽章

カール・ベーム指揮チエコ・フィルハーモニー管弦楽団

(1971.8.8 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)